

猿投窯編年の再検討について

檜 崎 彰 一
斎 藤 孝 正

1. 再検討の主旨

最近の猿投窯における発掘調査の成果や、隣接する尾北窯、さらに岐阜県的美濃須衛窯・美濃窯（東濃）等における発掘調査の成果から、従来の猿投窯編年に対して再検討を必要とする問題点の存在することが明らかになった。つまり、

- ① 飛鳥時代の編年区分の問題
- ② 奈良時代の編年区分、特に（原始）灰釉陶器の初現の問題
- ③ 平安時代の編年区分、特に灰釉陶器の終末期の編年区分の問題

以上の3点である。したがって、この機会にそれぞれの問題点を指摘し、猿投窯編年の再検討を行ないたい。

2. 飛鳥時代の編年区分について

従来の猿投窯編年では、7世紀後半から8世紀前半は大きく岩崎17号窯式→高蔵寺2号窯式に編年されてきた。これに対して岐阜市老洞古窯跡群の発掘調査の成果等から、従来高蔵寺2号窯式に含めて考えてきた岩崎41号窯を再び「後期古墳時代の諸段階」における編年区分と同様に、独立した窯式として認識して、これを上述の両窯式の間位置づけ、岩崎17号窯式→岩崎41号窯式→高蔵寺2号窯式とすべきであることが明らかにされた。したがって、今後はこの編年に従うことにし、従来の編年を修正することにしたい。

この岩崎41号窯式は、古墳時代の伝統を引く受け部を有する杯身とその蓋の組み合わせの消失によって、岩崎17号窯式と区分される。岩崎17号窯式に出現した内面にかえりを有する蓋は本窯式まで残存しており、高蔵寺2号窯式において完全に消失する。杯類では無台

杯身が普遍化して形態的に多様化する傾向がみられるようになるが、無台杯身が完全に2種類に分化するのは高蔵寺2号窯式からである。また、高蔵寺2号窯式からは仏器としての佐波理製品を模倣したもの（例えば椀とその蓋等）が出現するが、本窯式ではまだ出現していない。

なお、その他の詳細な点に関しては、付図の編年表および「老洞古窯跡群発掘調査報告書」を参照していただきたい。

3. 奈良時代の編年区分、特に（原始）灰釉陶器の初現の問題について

従来の猿投窯編年では、（原始）灰釉陶器の初現は、鳴海32号窯式に求めてきた。しかしながら、この鳴海32号窯式と前段階の高蔵寺2号窯式における窯式差はやや大きく、この間に一窯式入る可能性が想定されていたが、具体的な資料が確認できず、上述のような編年区分をとってきた。ところが、今年（2019年）の夏の日進町岩崎25号窯の発掘調査において、この間を補う資料が初めて確認された。したがって、ここで新たに岩崎25号窯式を設定し、従来の猿投窯編年を修正して、高蔵寺2号窯式→岩崎25号窯式→鳴海32号窯式とすることにし、（原始）灰釉陶器の初現も、従来の鳴海32号窯式から、この岩崎25号窯式に求めることにしたい。

この岩崎25号窯式から、従来は鳴海32号窯式にその初現を求めてきた、粘土塊口クロ水挽き技法が新たに導入され、底部に回転糸切り痕をそのまま残すものが出現するが、ごく少数の粘土紐造りでヘラ切りを行う無台杯身が認められる。瓶類では、高蔵寺2号窯式までみられた台付長頸瓶は存在せず、三段構成

によって口頸部が接合される、いわゆる長頸瓶が出現するが、双耳瓶・水瓶は鳴海32号窯式から出現する。さらに、岩崎25号窯式では、有台椀・底部をへら削り調整する無台杯身は出現しておらず、鳴海32号窯式から出現する。逆に前述した紐造りでへら切りを行う無台杯身の他に、器台・環状の耳を有する短頸壺がごく少数認められる。また、岩崎25号窯式の杯蓋や盤の口縁端部は、大部分のものはそのまま挽き出して仕上げているが、鳴海32号窯式のもの、大部分が端部を明確に折り返して仕上げたものになる。

4. 平安時代の編年区分、特に灰釉陶器の終末期の編年区分の問題について

(1) 折戸53号窯式以降の編年について

従来の猿投窯編年では、(黒笹90号窯式→)折戸53号窯式⇒白塗系陶器へという編年区分をとってきた。これに対して、最近の猿投窯での発掘調査、例えば名古屋市 NN-282号窯(県：NN-82号窯)の成果や、隣接する尾北窯の編年研究や岐阜県美濃窯(東濃)の編年研究等との対比によって、猿投窯の折戸53号窯式以降に新たに窯式を設定する必要性が生まれてきた。したがって、ここで新たに鳴海82号窯式・百代寺窯式の二窯式を設定し、従来の猿投窯編年を、折戸53号窯式→鳴海82号窯式→百代寺窯式⇒白塗系陶器へという編年に修正することにしたい。以下、各窯式の内容を簡単に説明していくことにする。

〈折戸53号窯式〉

本窯式から、椀・皿類の灰釉の施釉方法が刷毛塗りから、口縁部のみを漬け掛けによって施釉するものになる。また、へら削り調整によって消されていた外面底部の回転糸切り痕が猿投窯においてはそのまま残されるようになり、外面腰部のへら削り調整もほとんど施されなくなる。高台は、比較的細長く内側下端が内彎する三日月高台から、やや幅広く低く内側下端の内彎が認められない三日月高台になるが、全体に粗雑な作りのものが多

く、種々の形態のものも存在し、規格性がみられなくなる。本窯式からは、双耳瓶・浄瓶・平瓶・稜皿・三足盤・四足壺・唾壺・双耳壺・大型手付瓶・受け部を有する托等はみられなくなる。瓶類では口頸部と胴部との接合部に凸帯を有するものが出現し、耳皿ではヒダを作り出さなくなる。水注は黒笹90号窯式から出現した、北宋のものを模倣したものと考えられる(平出遺跡出土の緑釉水注のタイプ)ものになると考えられる。水瓶は口縁帯を作り出さずに端部をそのまま挽き出して仕上げるものが主となり、また小瓶・大型瓶・内外面に段を有する狭縁の段皿はほとんどみられなくなる。

〈鳴海82号窯式〉

名古屋市鳴海82号窯を標式とするが、その他に本窯式に属するものとして広久手C谷3号窯・東山72号窯等がある。

本窯式から、深い体部に細くて高い高台を有する椀・口縁端部を折り返して盤の口縁と同様に仕上げた折縁皿・受け部を有しないやや小型の托が新たに出現する。椀・皿類の高台は一層粗雑化したものになり、皿類は全体に小型化し、段皿では内外面に段を有する狭縁のものはみられなくなる。また椀類の内面口縁端部に沈線が施されるものも出現してくるものと考えられる。前窯式より多くみられるようになった広口瓶は、口縁帯を端部を上方に挽き上げて作り出すものが多くみられるようになる。

〈百代寺窯式〉

瀬戸市百代寺古窯を標式とするが、その他に本窯式に属するものとして広久手F谷窯・東山53号窯等がある。

本窯式になると器種がさらに減少し、椀・小椀・小椀を浅くした皿・その皿の外面に稜を有する稜皿・小型化した段皿・大平鉢・広口瓶・水注・水瓶等のみになる。椀・皿類の高台は断面三角形の三角高台になり、椀類では前窯式のものほど深い体部を有するものは

みられなくなるが、口縁端部を断面三角形にした白磁の玉縁口縁をもつ鉢類を模倣したものが顕著にみられるようになる。また瓶類の把手に縄状把手がみられるようになる。

この百代寺窯式を最後にして、灰釉陶器の生産は無釉の椀類を量産する白磁系陶器の生産へと転換していく。

(2) 尾北窯・美濃窯（東濃）との対比について

上述した猿投窯の編年を、尾北窯・美濃窯（東濃）の編年に対比したのがA案・B案である。各窯式の並行関係はこの表のようになると考えられるが、問題となるのは白磁系陶器への転換の地域的な様相をどのように理解するかということである。これは現時点において、尾北窯・美濃窯（東濃）の初期白磁系陶器の様相が猿投窯ほど明確にはされておら

ず、東山G-105号窯式（猿投窯三筋文系陶器第Ⅰ期のもの）に対応するものの存否を含めてその実体が不明瞭であるということによるものである。したがって、各窯業地が同時に白磁系陶器へ転換したと考えた場合にはA案のように、猿投窯（特に東山地区）においては他地域に先行して転換したと考えた場合にはB案のように対比できる。

この問題は窯業史上において、古代から中世への転換をどのように理解するかという基本的な問題と関わり、今後は生産地の猿投窯・尾北窯・美濃窯（東濃）等における初期白磁系陶器の実体を明らかにして各窯業地間の対比を行うとともに、消費地の遺跡における発掘調査において各窯業地の製品の共伴例を集積することによってその対比が明らかにされていくことが望まれる。

猿 投 ・ 尾 北 ・ 美 濃 窯 編 年 対 比 表

編 年 対 比 A 案

猿 投 窯	尾 北 窯	美 濃 窯
K - 14	S - 47	
K - 90	S - 4	光ヶ丘 - 1
O - 53	S - 4 ^{**}	大原 - 2
NN - 82 [*]	S - 27	虎溪山 - 1
百代寺	S - 1	丸石 - 2

編 年 対 比 B 案

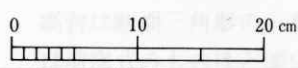
猿 投 窯	尾 北 窯	美 濃 窯
K - 14	S - 47	
K - 90	S - 4	光ヶ丘 - 1
O - 53	S - 4'	大原 - 2
NN - 82	S - 27	虎溪山 - 1
H-G-105 百代寺	S - 1	丸石 - 2

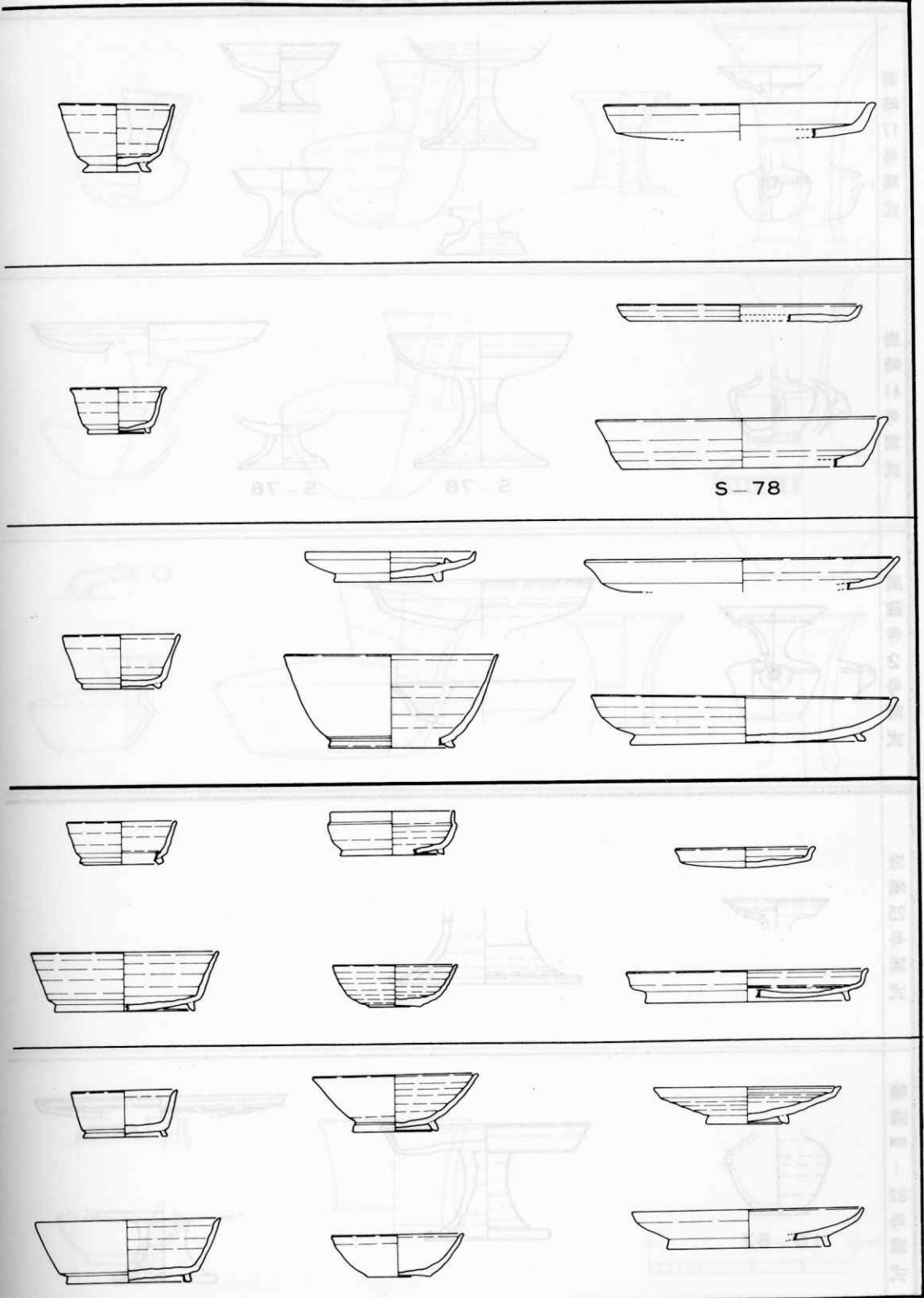
* 名古屋市NN-282号窯

** S-4出土の新しい時期のもの。

猿投窯編年表 I - 1

岩崎 17号窯式			
岩崎 41号窯式	<p>S-78</p>		
高蔵寺 2号窯式			
岩崎 25号窯式			
鳴海 NN 32号窯式			

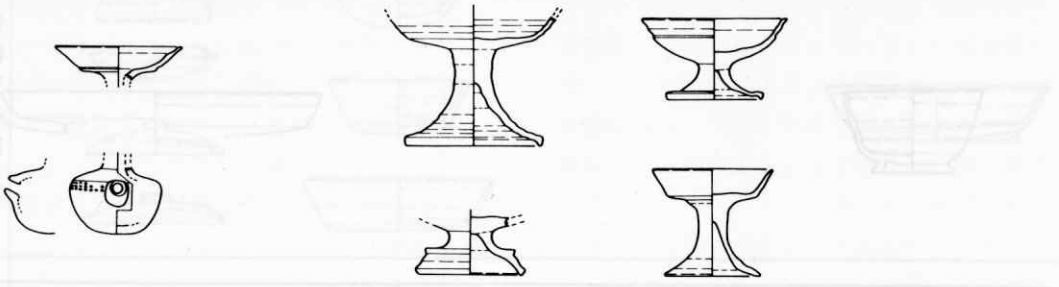




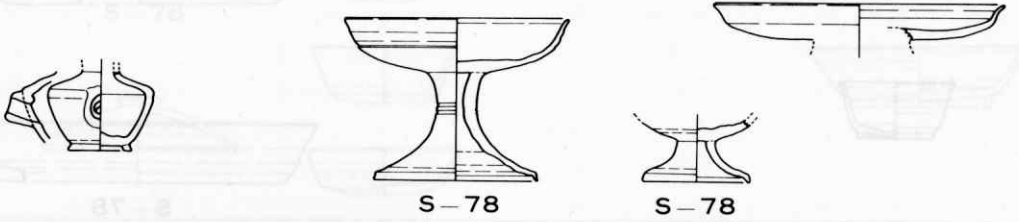
(榎崎 彰一・齊藤 孝正)

猿投窯編年表 I - 2

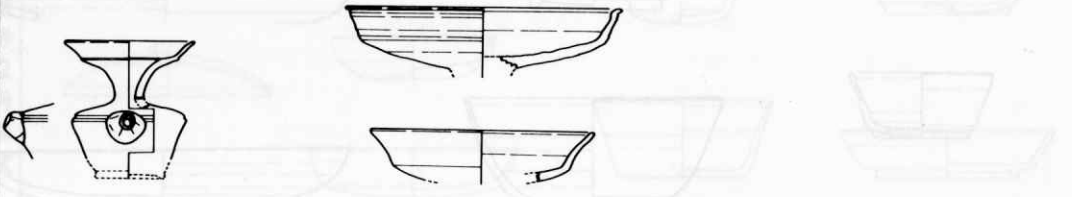
岩崎17号窯式



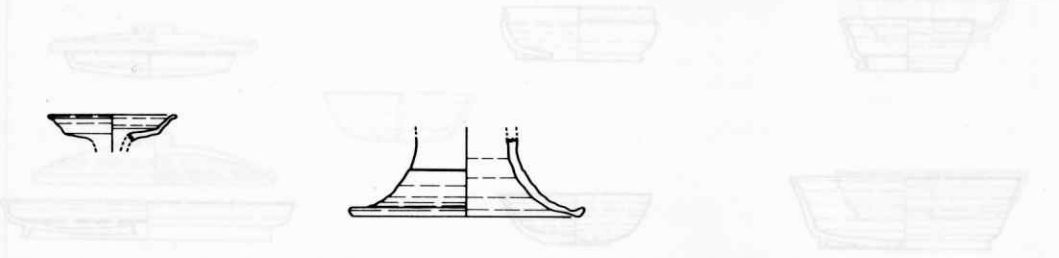
岩崎41号窯式



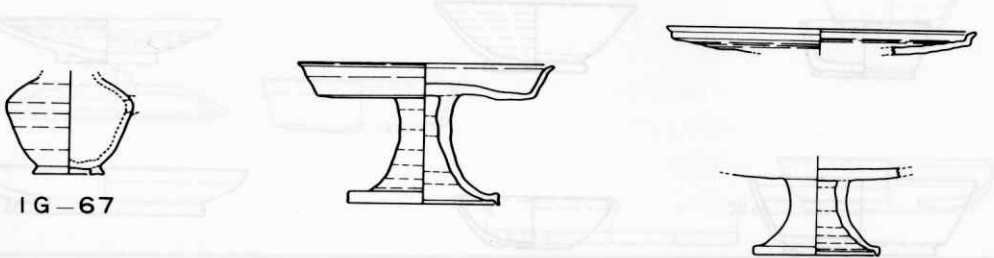
高藏寺2号窯式

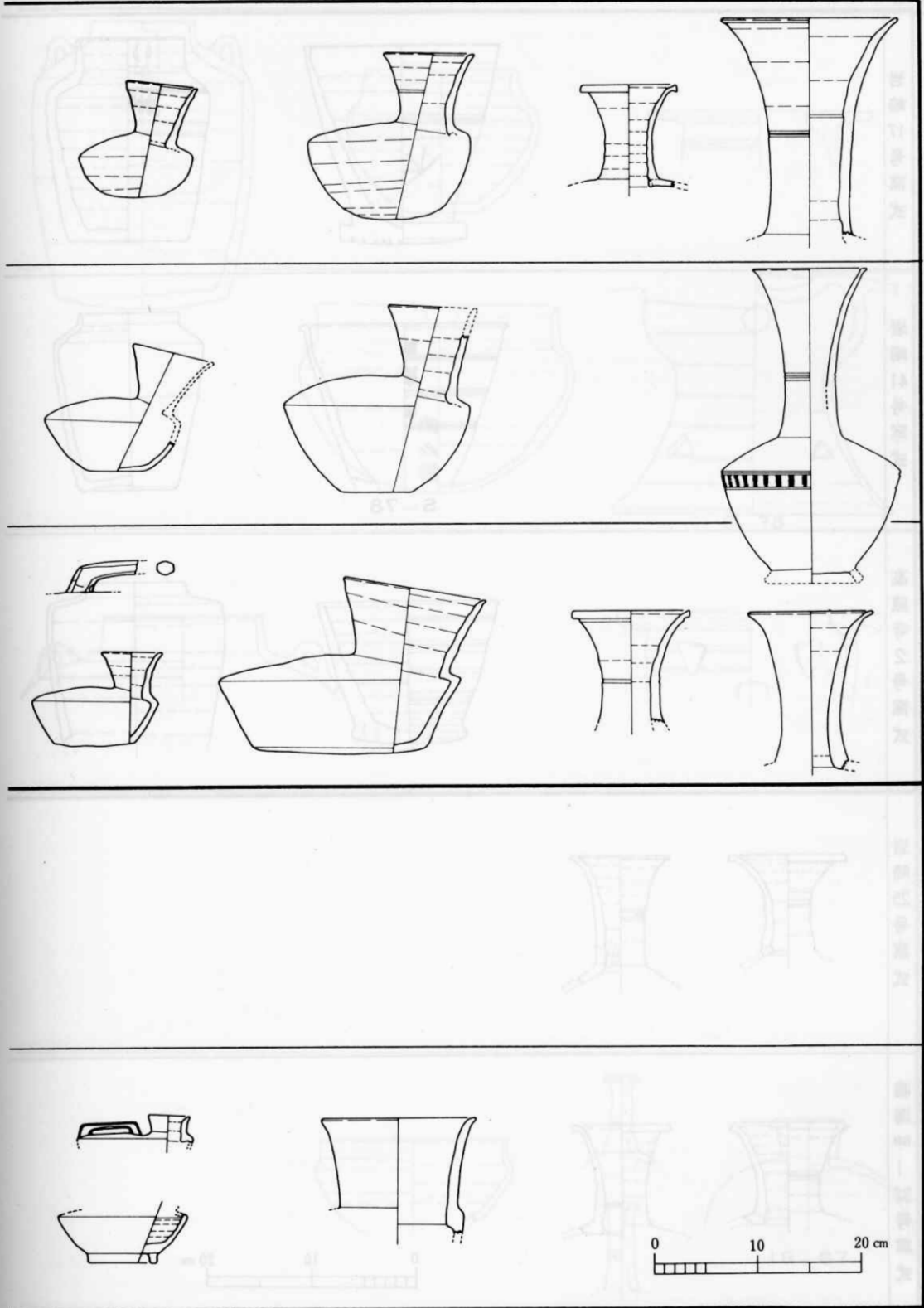


岩崎25号窯式



鳴海NN-32号窯式

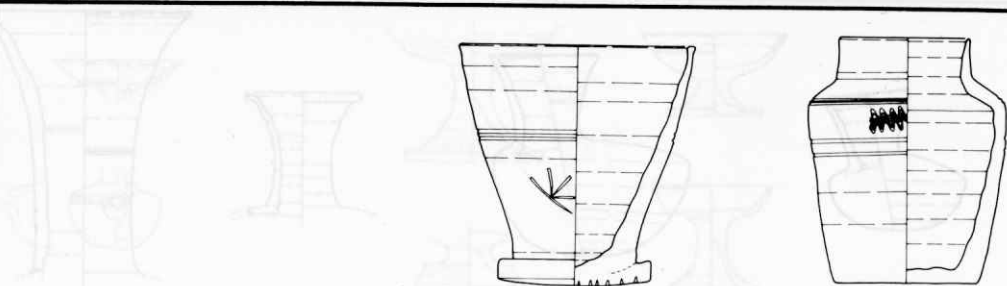




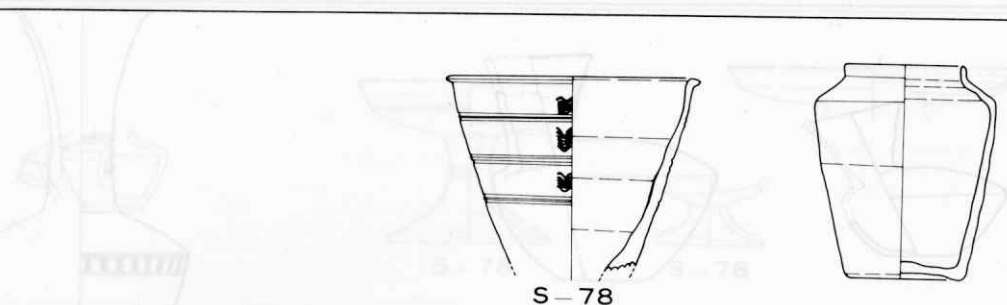
(檀崎彰一・齐藤孝正)

猿投窯編年表 I - 3

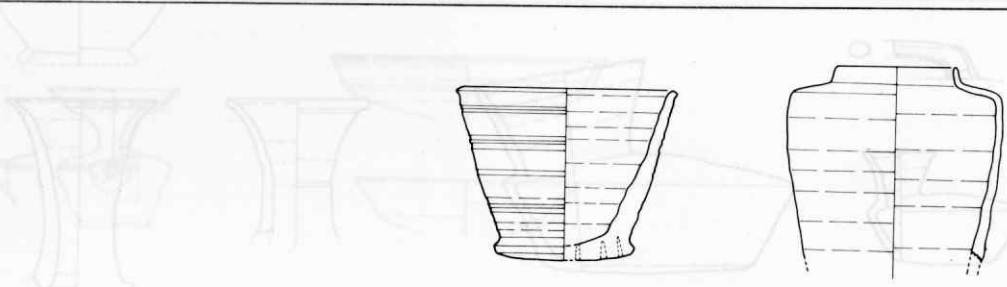
岩崎17号窯式



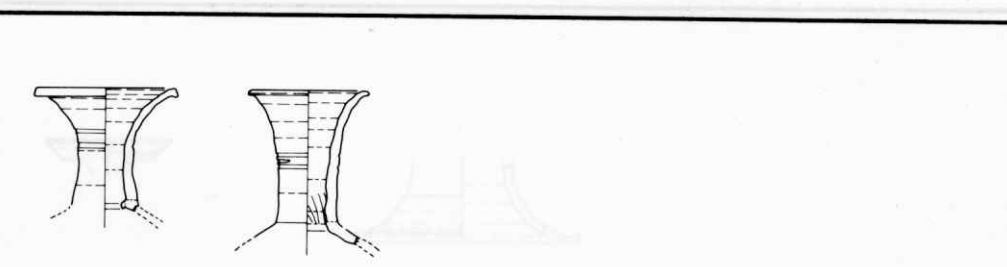
岩崎41号窯式



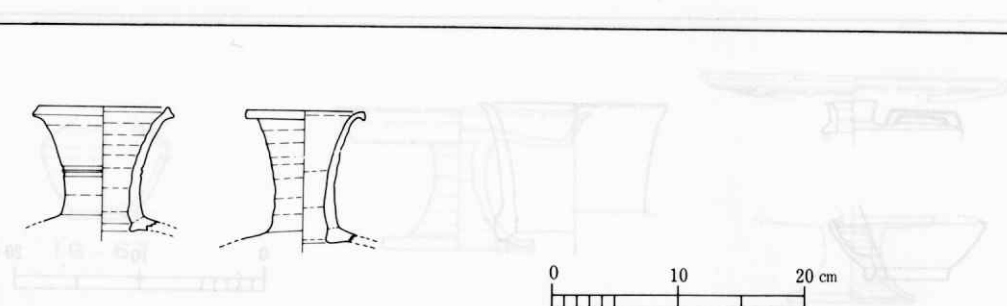
高蔵寺2号窯式



岩崎25号窯式

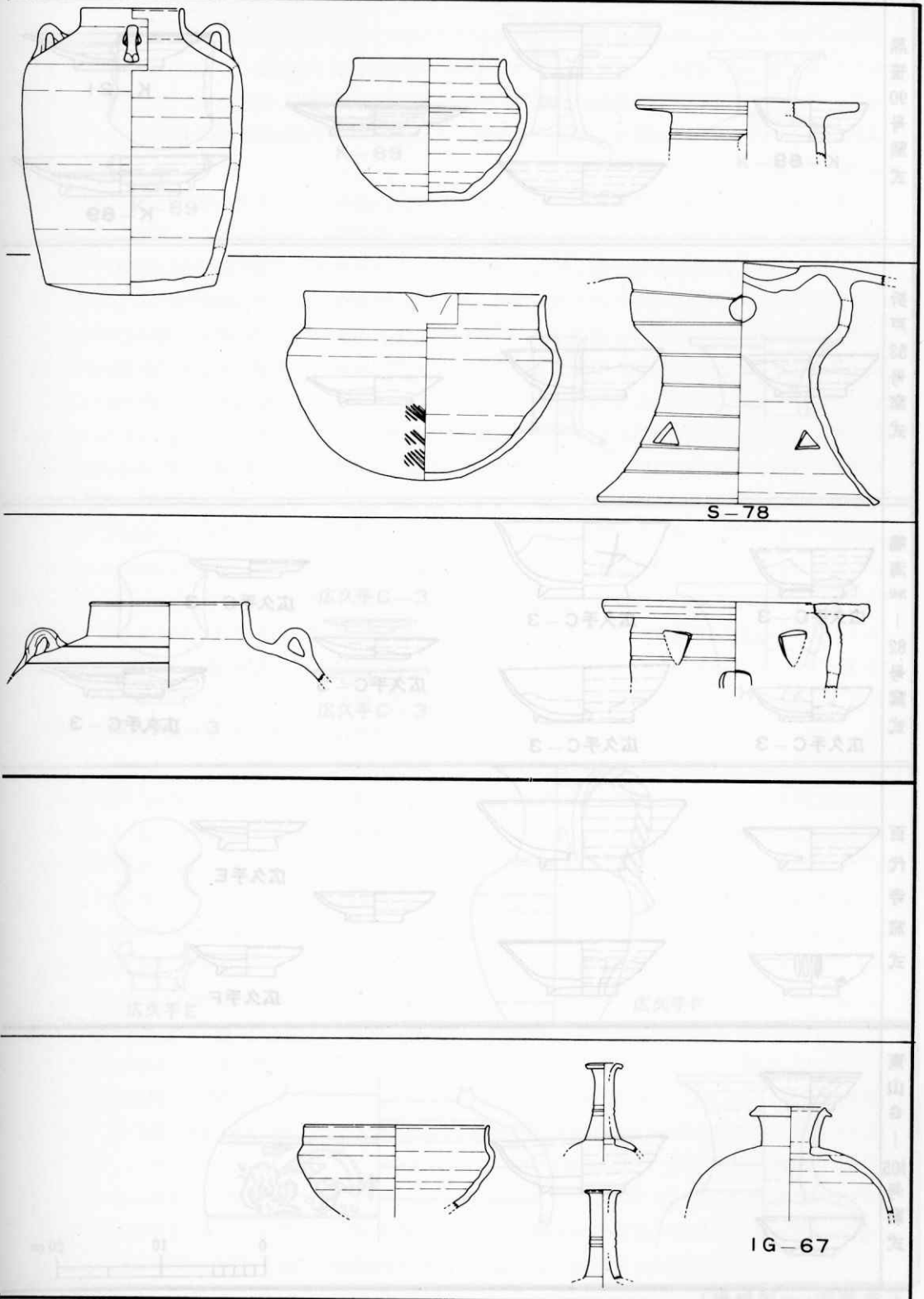


鳴海MN-32号窯式



Ⅱ 表 羊 鬲 案 对 数

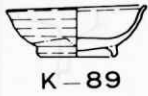
(第 3 图)



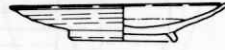
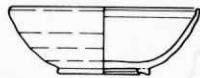
(檀 崎 彰 一 · 齐 藤 孝 正)

猿投窯編年表 II

黒笹
90号窯式



K-89



K-21



K-89

折戸
53号窯式



鳴海
NN | 82号窯式



広久手C-3



広久手C-3



広久手C-3



広久手C-3



広久手C-3

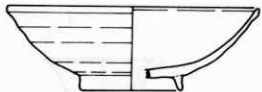
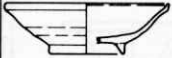


広久手C-3

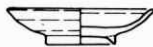
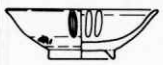


広久手C-3

百代寺
窯式

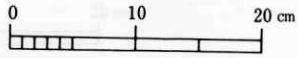
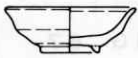


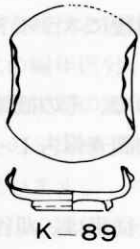
広久手E



広久手F

東山
G | 105号窯式

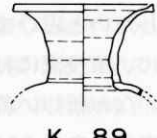
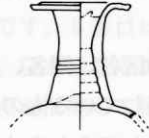




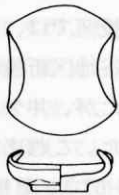
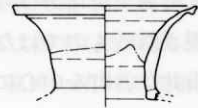
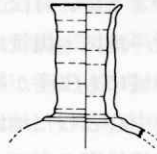
K-89



K-89



K-89

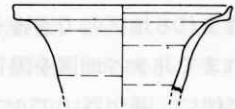


広久手C-3

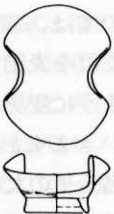
広久手C-3



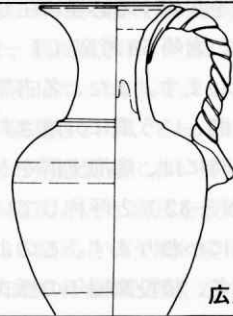
広久手C-3



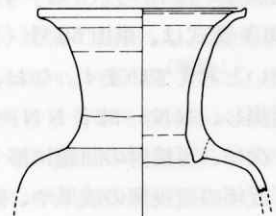
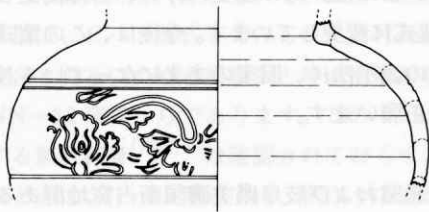
H-72



広久手E



広久手F



《発表—斉藤孝正》

レジュメにそって、猿投窯編年の再検討についてお話し、時間が許せば最後にスライドを使って説明したいと思います。

最初に、猿投窯において、地区名、窯名、窯式名を若干変更していますので、その概略を説明します。なお新しい名称を使用しているものは、『猿投西南麓古窯跡群分布調査報告Ⅰ・Ⅱ』（愛知県教育委員会 1980・1981）であります。

従来の猿投窯の地区設定の変更については井ヶ谷地区の新設であります。従来は、刈谷市井ヶ谷町を中心とした地区は、大きく黒笹（南部）地区として理解してきましたが、近年の猿投窯の分布調査等の研究成果により、刈谷市井ヶ谷町を中心とした地域は、黒笹地区北部の方からの、猿投窯内部の拡散に伴い付随的に外部へ派生したもので、例えば名古屋市鳴海地区が今日、有松支群と鳴海支群に分けられています。有松支群が鳴海支群から付随的に派生したという状況と同一視されるものではなく、折戸地区・黒笹地区—特に北部地区と同様に8世紀代に入り新たに刈谷市井ヶ谷町を中心とした地域にも生産が開始されたということが明らかになってきました。従いまして、刈谷市井ヶ谷町を中心とした地域も従来の折戸地区、黒笹地区（特にこれはこれまでの北部地域ですが）と同様に猿投窯の中の一つの独立した地域として認識し、これを井ヶ谷地区と呼称し、従来、黒笹地区と大きくとらえてきた地域を北部地区に限って黒笹地区と呼ぶこととするよう変更いたしました。従って、地区設定に伴い、猿投窯の窯名のつけ方に従うとしても窯名を変更しなければならない状況が生まれてきました。すなわち、猿投窯では、その地区に含まれる地区名で通番をつけるという窯名方法をとっている関係上、井ヶ谷地区新設に伴い、これまで井ヶ谷地区を黒笹—アルファベットのKの略称で呼称されてきましたが、井ヶ谷地区新設に伴い、井ヶ谷、アルファベットでIGの略称で呼ぶ必要が生じてきました。これまで広く知られた具体的な窯名では、従来黒笹67号（K-67）は井ヶ谷67号（IG-67）、黒笹78号窯は、井ヶ谷78号窯（IG-78）となります。その他、井ヶ谷地区以外でも部分的に分布の調査の結果、地区設定の境界線を変更する必要が生じたものがあり、一部境界変更しています。これに伴い、代表的なものでは、岩崎50号窯（I-50）が、東山地区に含まれるため、これを東山50号窯（H-50）と変更します。また、名古屋市に含まれる鳴海地区においては、二つの支群すなわち鳴海支群、有松支群という風に分離されています。従って、両者の支群を表記する必要上、これを略号で表記する時には、鳴海支群をNN、有松支群をNAというように変更しています。従って鳴海32号窯（N-32）と呼称していたものは、今回の表示法でいきますと、鳴海—NN-32号窯という表示法にかかります。このように地区名の変更に伴う窯名変更のため、これまで使っていた標式窯名、猿投窯編年の標式名に用いていた窯式名も同時に変更する必要が生じてきました。すなわち、鳴海N-32窯式が鳴海NN-32窯式に、黒笹78号（K-78）窯式が井ヶ谷78号（IG-78）窯式に、また境界線の変更に伴い、名称変更した岩崎50号（I-50）窯式は、東山50号（H-50）窯式に変更しています。今後は、この窯式名を使用していきたいと考えています。なお、レジュメの表示法に、旧来のままになっているN-32、N-82は、変更し、NN-32、NN-82とご訂正願います。

次に、再検討の問題に移ります。

近年の猿投窯の成果や、隣接する尾北窯および岐阜県美濃須衛古窯址群あるいは美濃窯（多治見市を中心とする東濃地方）等における発掘調査の成果などから、従来の猿投窯編年について再

検討を必要とする問題が存在することが明らかになってきました。具体的な内容としまして、1つは、平安時代と直接の関係はありませんが、飛鳥時代の編年区分の問題があります。2番目に、奈良時代の編年区分、特に原始灰釉陶器初現の問題です。3番目は、平安時代の編年区分、特に灰釉陶器最末期の編年区分に関する問題であります。以上の3点が再検討を要する問題でありまして、このシンポジウムを機会に、それぞれの問題点を指摘して猿投窯編年の再検討を行ってみたいと思います。

飛鳥時代の編年区分について。従来、猿投窯編年においては、7世紀後半代から8世紀前半代において、大きくI-17号窯式、C-2（高蔵寺2）号窯式と編年されてきました。C-2号窯は、大きくは、尾北窯に含まれるものですが、猿投窯に良好な編年標式資料がない関係上、従来、尾北窯のC-2号窯資料を猿投窯編年に使用したものであります。これに対して、岐阜市老洞古窯址群の発掘成果等の研究から、従来、C-2号窯式に含めて考えて来た猿投窯のI-41号窯を再び『後期古墳時代の諸段階』（植崎1959）における編年区分と同様に、独立した窯式と認識し、これを両窯式の間中に位置付け、I-17窯式→I-41窯式→C-2窯式とすべきであることが明らかになってきました。従って、今後は、このような方向で修正していきたいと考えます（P56～61、第1図～第3図）。具体的な窯式の内容は、このI-41窯式において、古墳時代の伝統をひく蓋受け部を有する杯身と、その蓋の組合わせが消失しており、大きくI-17窯式とは区分されることであります。I-17窯式に出現した内面にかえりを有する蓋は、I-41窯式まで残存しますが、C-2窯式には消失しています。杯類では、有台杯身が普遍化し、形態的に多様化する傾向が見られるようになりますが、有台杯身が完全に2種類に分化するのは、C-2窯式からであります。また、C-2窯式からは、仏器としての佐波理製品を模倣した碗と、それに伴う蓋が出現していますが、I-41窯式ではこのような金属器を模倣したものは出現していません。I-41窯式の問題は、今回の本来の趣旨とは関係ないので、詳細な内容については、岐阜市教委発行の『老洞古窯跡発掘調査報告書』（1981）を参照していただきたいと思います。

次に、2番目の問題の奈良時代の編年区分、特に原始灰釉陶器の初現の問題であります。従来、猿投窯の編年においては、原始灰釉陶器の初現は、鳴海（NN）-32窯式に求めてきましたが、NN-32窯式と前段階のC-2窯式における窯式差はやゝ大きく、この間に1窯式入る可能性が想定されていましたが、これまで具体的な資料が確認されず、C-2→NN-32の編年をとってきました。ところが、この夏、日進町I-25号窯の発掘調査において、この間を補う資料が初めて確認されました。従って、ここで新たにI-25窯式という窯式を設定し、従来の猿投窯編年を一部修正し、C-2窯式→I-25窯式→NN-32窯式という風に変更し、従来NN-32窯式に求めてきました原始灰釉陶器の初現をI-25窯式に求めたいと考えています（P56～61、第1～3図）。具体的なI-25窯式の内容ですが、従来はNN-32窯式にその初現を求めてきた粘土塊ロクロ水挽き技法がすでにI-25窯式で導入されていて、底部に回転糸切り痕をそのまま残す無台碗類が出現しています。瓶類は、C-2窯式までみられた台付長頸瓶は、I-25窯で消失し、三段構成によって口頸部が接合されるいわゆる長頸瓶と呼ぶ器形が新たに出現します。双耳瓶^{（補注1）}、水瓶^{（補注2）}は、次のNN-32窯式からであります。このI-25窯式では高台を有する碗あるいは底部をへら削り調整する無台杯身^{（補注1）}は確認されておらず、次のNN-32窯式から出現するものとみなれます。これと逆に、I-25窯式では、紐作りで底部をへら切りで切り離す無台杯身が存在し、その他、器台・環状耳付短頸壺等がごく少数認められます。また、I-25窯式の杯の蓋や

盤の口縁端部の成形は、大部分のものはそのまま引出して仕上げていますが、次のNN-82 窯式では、端部を明確に折り返して仕上げているもの、いわゆる「く」の字形に端部を成形しているものに変化します。

次いで、3 番目の平安時代の編年区分、特に灰釉陶器の終末期の編年区分について説明します。

従来、猿投窯の編年において、K-90 → O-53 窯式、そして白瓷系陶器、いわゆる無釉の椀類を量産する山茶椀と呼ぶ陶器へ変化するという編年区分をとってきました。しかしながら、最近の猿投窯の発掘調査、例えば名古屋市で行われたNN-282 号窯（名古屋市の呼称。愛知県の番号ではNN-82 号窯）の発掘成果や、猿投窯に隣接する小牧市を中心とする尾北窯の編年研究および岐阜県的美濃窯特に多治見を中心とする東濃地方の編年研究等との対比によって、猿投窯のO-53 窯式以降に新たに窯式を設定する必要が生じてきました。従ってこの機会に新たにNN-82 窯式^(補注³)、百代寺窯式という2つの窯式を新設し、従来の猿投窯の編年をO-53 → NN-82 → 百代寺そして白瓷系陶器へという編年に修正したいと思っています。以下、各窯の内容を具体的に説明します。（P 62・63、第4図）

（O-53 窯式について）本窯式から、椀類および皿類の灰釉の施釉方法が大きく変わります。K-90 窯式の刷毛塗りものから、口縁部のみを漬け掛けによって施釉するいわゆる漬け掛け技法へ転化しています。また、K-90 窯式において、へら削り調整によって椀・皿類の底部の外面の回転糸切り痕は消されていましたが、この猿投窯においては、O-53 窯式から回転糸切り痕がそのまま底部に残されるようになります。さらに外面の腰部におけるへら削り調整もO-53 窯式からはほとんどみられなくなります。椀・皿類の高台においては、K-90 窯式における高台が比較的細長く、内面の下端が内弯する、いわゆる三日月高台と呼称するものがO-53 窯式になると、やゝ巾が広くなり、全体に高さも低くなって、内側下端の内弯が認められない三日月高台となりますが、全体的に高台の作りが粗雑になり、高台形態としては、各種のものが出現します。また、O-53 窯式からは、K-90 窯式にみられた双耳瓶、浄瓶、平瓶、稜皿、三足盤、四足壺、唾壺、双耳壺、大形の手付瓶、受け具を有する托等が生産されなくなります。瓶類においては、口頸部と胴部の接合部に、いわゆる粘土帯を貼り付けた突帯を有するものが出現してきて、耳皿では、鬘を作らないものがこの段階から出現します。水注は、K-90 窯式から出現し、北宋代のもを模倣したと考えられます。この期のもは、平出遺跡（長野県）出土の緑釉水注タイプの器形のもと考えます。水瓶については、この段階から口縁帯を作り出さないで、端部をそのまま引出して仕上げるものが主となると考えます。編年図表猿投-2（本書P 63）のO-53 窯式の右から2つ目のものがそれです。また、O-53 窯式においては、小瓶あるいは大形瓶、内外に段を有する緑帯の狭い狭縁の段皿はほとんどみられなくなります。

（NN-82 窯式について）名古屋市鳴海(NN) 82 号窯を標式とします。この窯式に含まれるものに瀬戸市広久手C谷 3 号窯および東山(H)-72 号窯等があります。このNN-82 窯式からは、深い体部を有して底部に細くて高い高台を有する椀（P 62、第4図左、NN-82 小椀の右上段の椀）あるいは口縁端部を折り返し、須恵器の有台盤と同様の形の折り縁皿（P 62、第4図左、NN-82 段皿の左上）、受け具を有しないやゝ小形の托（P 63、第4図、NN-82 耳皿の右2つ）の3種が新たにこの段階から出現します。この段階の椀・皿類の高台は、前段階のO-53 窯式のものに比べると一層粗雑化がみられ、皿類においては、前段階のものに比べ全体にやゝ小形化の傾向があり、段皿においては、内外面に段を有する狭縁の段皿は消失します。また、椀類においては、内

面の口縁端部に沈線が施されるものがこの段階から出現すると考えます。O-53窯式から多くみられるようになった広口瓶では、口縁端部を上方に引上げて作り出すものが多くみられるようになります。なお、緑釉陶器に関しては、NN-82 窯式をもって、猿投窯での生産は終焉します。

(百代寺窯式について) 本窯式は、瀬戸市百代寺古窯を標式としています。他に、瀬戸市広久手F谷窯、東山(H)-53号窯があります。この段階になりますと、前段階にみられた器種がさらに減少し、椀・小椀、さらに小椀を浅くした感じの皿、皿の外面に稜を有する稜皿、小形化した段皿、大平鉢、広口瓶、水注、水瓶等が生産されるにすぎなくなります。百代寺窯式における椀・皿類の高台は、断面三角形の、いわゆる三角高台になっていて、椀類では、前窯式にみられたような深い体部を有するものはこの段階にみられなくなります。また、柴垣さんの発表にあった口縁端部を断面三角形にした、いわゆる白磁玉縁口縁椀を模倣したといわれる椀類がこの段階において顕著にみられます。また、瓶類においても、把手に板状のもの、縄状の把手をつけるものがみられるようになります。この百代寺窯式を最後として、灰釉陶器の生産は無釉の椀類を量産する白瓷系陶器へ転換していったものと考えています。

次に、これまで述べました猿投窯の編年と、隣接する灰釉陶器の主要な生産地である尾北窯と美濃窯との編年関係の対比について説明します。

猿投窯と尾北・美濃窯の編年とを対比したものが、レジュメの編年対比表、A案・B案であります。各窯式の併行関係については、この表のようになると思いますが、問題になるのは、白瓷系陶器への転換の地域的な様相をどのように理解するかという点であります。この問題は、現在、尾北・美濃窯における初期白瓷系陶器の様相、具体的には、11世紀末から12世紀前半における尾北・美濃窯の様相が猿投窯ほど明確ではないので、東山(H-G-1)105窯式(これは、猿投窯三筋文陶器I期に当りますが)に対応する白瓷系陶器は尾北・美濃窯において存在するのか、しないのかという問題を含めその実態が今一つ明確でないであります。従って、現時点で、各窯業地が同時に灰釉陶器から白瓷陶器窯へ転換したと考えた場合は、編年対比表A案が考えられますし、猿投窯・特に東山地区においては尾北・美濃窯に先行して白瓷系陶器へ転換したと考えた場合には、編年対比表はB案といったような対比案になると考えられます。

この問題に関しては、窯業史上において、古代から中世への転換をどのように理解するかという、基本的問題にかかわりますので、今後は、猿投窯を含めた生産地全体、尾北窯、美濃窯等における初期白瓷系陶器の実態を明らかにしていく必要と、この各窯業地間の対比を行い、さらには、消費地遺跡における各窯業生産地の製品の共伴例を集積することが問題解決の糸口となるかと考えます。

では、スライドの説明に移ります。

- (1) C-2 窯の杯蓋です。全体に頂部の膨みがなく、平らな作りで、端部はそのまま引出しています。
- (2) C-2 窯の杯身です。ヘラ切り痕があります。
- (3) C-2 窯の線です。本来は底部に高台がつくものと考えます。
- (4) C-2 窯の器台です。
- (5) I-25 窯出土の、底部に糸切り痕を残す椀です。従来、糸切りはNN-32 窯からと考えられていましたが、I-25 窯から出現します。
- (6) (I-25) 前の椀とは異なり、底部にヘラ切り痕を残す有台杯身です。成形としては、粘土紐

作りと考えられます。無台杯身も若干残ります。

- (7) (I-25)杯の蓋です。C-2窯とよく似て、頂部は平坦で、口縁部もそのまま下方へ引き出します。
- (8) (I-25)有台の盤です。口縁部の作りが杯の蓋にみられるようにそのまま上方へ引き出します。
- (9) (I-25)合子と考えられるものです。
- (10) (I-25)罎の口縁部です。罎は次のNN-32窯式まで残存すると考えます。
- (11) (I-25)新しく出現した長頸瓶の口頸部です。頸に二重沈線があります。
- (12) (I-25)同じく長頸瓶の口頸部です。
- (13) (I-25)前の長頸瓶の接合部を示します。中間に粘土板をあてる三段構成です。
- (14) NN-32窯の底部に回転糸切り痕を残す椀です。
- (15) (NN-32)無台杯身です。底部をへら削りで成形しています。この形態は、I-25窯では確認していません。
- (16) (NN-32)高台を有する椀です。このタイプもI-25窯では確認されません。NN-32窯から出現するものと思われます。
- (17) (NN-32)蓋です。I-25窯に比べ頂部が膨み口縁部も「く」の字形に作り出しています。
- (18) (NN-32)有台の盤です。I-25窯が口縁部をそのまま引上げるものに対し、「く」の字形に折り返すものとなります。
- (19) (NN-32)長頸瓶です。頸部中央に沈線のないタイプです。
- (20) (NN-32)長頸瓶です。これは中央に二重沈線を施します。
- (21) (NN-32)水瓶です。この段階を初現として以後に続きます。
- (22) K-14号窯の灰釉椀です。施釉方法としては、内面全面施釉し、三叉トチを用い重ね焼をします。高台形態は角高台であります。
- (23) (K-14) 同じ椀の底面です。底部はへら削り調整で、回転糸切りを消しています。
- (24) K-89号窯の椀(K-90窯式)です。施釉方法としては、内面あるいは内外面体部を刷毛塗りによって施釉するものです。中に、見込み部分だけ施釉するものがあったり、見込みも施釉せず体部上方だけ施釉するものもあります。
- (25) (K-89)同じ椀の底面です。高台は三日月高台、底部はへら削りで回転糸切り痕を消しています。腰部にもへら削り調整があります。
- (26) (K-89)托です。受け具を有するタイプの托です。
- (27) K-90号窯の水瓶です。この場合は、口縁部に口縁帯を作り出すタイプです。
- (28) O-53号窯の椀です。この段階から施釉方法が口縁部のみに釉薬を漬ける漬け掛けにかわりまします。
- (29) (O-53)同じ椀の底面です。回転糸切り痕がこの段階からそのまま残されます。
- (30) (O-53)水瓶です。K-90窯に比べ、口縁端部をそのまま引出し、口縁帯はありません。口頸部と肩の接合部に突帯を作り出しています。
- (31) NN-82号窯の椀です。この段階から深い体部を有し、それに見合う細くて長い高台をつけています。
- (32) (NN-82)同じくその底面です。
- (33) (NN-82)広口瓶です。口頸部と胴部の接合部に突帯を作り出しています。

⁶⁴ 広久手C 3号窯の托です。K-89窯と異なり、上面に受け具を有しない小形のものになります。

⁶⁵ (広久手C 3) 椀です。深い体部に比較的細長い高台を作り出します。内面の口縁部に沈線を施します。この手法は、NN-82段階から始まると考えます。

⁶⁶ (広久手C 3) 同じくその底部です。

⁶⁷ 百代寺窯出土の皿です。非常に浅く、全体として椀を小形にした感じの皿です。

⁶⁸ (百代寺) 椀です。口縁部を玉縁状に仕上げている椀で、百代寺窯式から出現します。

⁶⁹ 広久手F谷窯出土の椀です。灰釉を施す椀としては、最後のものと考えています。

以上で発表を終わります。(発表以上)

— 質 疑 —

(質問一向坂鋼二) 大ざっぱに、この年代観はどんな風でしょうか？

(斉藤) 一応、灰釉陶器の最末に関しては、11世紀末と考えていますが、O-53窯式以降に新たに2窯式を設定しました関係上、若干従来の編年からさかのぼる可能性があります、具体的に各窯式がどの年代に比定できるかは、今後の研究を待って確定していきたいと考えています。^(補注4)

(質問一向坂) それに関して、うしろを含めて、3つの巾で前の方へずれていくととらえられるのでしょうか？

(斉藤) 一応窯式設定としては、新たに設定した2窯式に関しても、同じような窯式設定の考え方で設定していますが、具体的な実年代に関しては、今後の研究を待ちたいと思います。

(質問一吉岡康暢) 中世陶の基本的セットは、基本三種と呼んでいますか、片口鉢が定形定量的に組み込まれるのがメルクマールになると思います。猿投の場合には、大平鉢の系譜から考えておられるやに伺っていますが、その系譜関係の地名、定形定量化される時期についてお尋ねします。

(斉藤) 大平鉢の出自に関しては答えられませんが、大平鉢に片口が出る段階は、最後の百代寺の時期と考えます。^(補注5)

(吉岡) 百代寺では量的にどうでしょうか？

(斉藤) 片口がつくものの量は、破片からは全体器形が判らないため何ともいえません。百代寺の段階に比定される窯から、片口の大平鉢の破片が確認されるということが判っているということです。

(質問一兼康保明) NN-82窯式と百代寺窯式の灰釉陶が集落跡から出土している例は多いのでしょうか？

(斉藤) NN-82窯式に関しては、長野県下、信州を中心として出土しています。百代寺段階のものは、明確に確認していませんが、京都市埋蔵文化財研究所から出版された資料集(『平安京跡発掘資料選』1980)の中をみても高台形態から、この段階に比定できるものがあるように私は思っています。

(兼康) 関連して、それらの年代観は矛盾しているのか、していないのかどちらでしょう。私の意見を先に言わせていただくと、私は、支持したいと思っているのです。それで、お聞きしたいのです。

(斉藤) 先ほどから申していますように、最終末、灰釉陶器の最終末に関しては、11世紀末ということではほぼ統一の見解ができあがっていると考えますが、今度設定した窯式が入る関係から

具体的にどの程度あがるのかということは、現段階の資料からは、確定的なことはいえないと思います。従って、今後より一層明確な共伴例あるいは年代の判る出土品等の類例を持って、具体的な年代比定を行いたいと考えています。

(榑崎彰一) 齊藤君の報告は、レジュメでみますように、私と連名になっています。これは、2人の間で検討した結果を齊藤君の方から報告したわけですが、若干、補足説明をさせていただかないと、よく判らないと思います。それは、最後に載せました編年対比表A案・B案の違いが判りにくいからだろうと思います。その点でご説明申し上げますが、実は、A案は齊藤案であります。B案は、榑崎案であります。この問題につきましては、随分検討しましたが、両者の統一が得られないままになりましたので、両案提出し、皆さんにご批判を仰ごうとしたのであります。率直に、ありのままの研究の現状をさらけ出した次第であります。齊藤案の場合には、尾北窯・美濃窯含めて並行的に、一円的に灰釉陶器は次の白瓷系陶器、つまり山茶碗窯へと転化するという斉一的な変化を考えています。それに対し、私は、百代寺窯と、白瓷系陶器の初現であるH-105号窯、これは並存する段階のものと考えているのです。その理由は、この段階、つまり百代寺の段階に至って、猿投窯の中心部あるいはその周辺部においても、窯の数が非常に減ってきます。極めて少なくなるという現象と、もう一つは、周辺部に一瀬戸などは周辺部にあたりますが—そういったところにはみられるが中心部にはほとんどみられなくなるという現象を考えますと、実は消費地の関係からみて、O-53以降、NN-82、広久手などの段階のものは、主として尾北・特に東濃系諸窯において大量に焼かれていて、これが東山道を通じて東日本、特に関東一円に送られています。その量は莫大な量ですが猿投窯における生産は微々たるものです。これは、東日本だけでなく、西日本においても例えば、平安京蘭林坊においては、O-53窯式まではわずかに猿投窯の製品が残りますが、NN82、広久手の段階のものは、完全に美濃製品にとって変わられているのです。そういった現象を考えますと、猿投窯における灰釉陶器の末期の生産は、非常に減少し、その中心は尾北窯あるいは東濃系諸窯へ移っていると思われまゝです。にもかかわらず、この段階の庶民の陶器に対する需要の増大というものを考えるならば、猿投窯中心部においては、いち早く、白瓷系陶器、つまり無釉の山茶碗窯へ突出して生産転換をはかっていたと考えるのが歴史的には自然ではないかというのが、私の考えであります。そういった点で、齊藤案と榑崎案と2つの考え方を率直にそのまま出した次第です。補足的に説明させていただきました。

(補注1) この二器種については、尾北窯の当窯式(I-25)に属するS-81号窯では確認されているが、猿投窯においては今のところ確認されていない。

中嶋隆 1982, 桃花台ニュータウン遺跡調査報告Ⅳ 小牧市篠岡古窯址群。小牧市教育委員会。

(補注2) その後、高蔵寺2(C-2)号窯の資料を整理した結果、水瓶が確認されたため、その出現はC-2号窯式に求められることになった。

榑崎彰一・齊藤孝正他 1983; 愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)。愛知県教育委員会。

(補注3) その後、NN-82号窯の資料を検討した結果、本窯自体はO-53号窯式に含まれるものであることが判明したため、今日では当窯式名としては、東山72(H-72)号窯式を使用している。

齊藤孝正 1982; 猿投窯における灰釉陶の展開。考古学ジャーナル 211。ニュー・サイ

エンス社。

(補注4) 具体的な年代観に関しては、前掲、齊藤1982、植崎・1983を参照されたい。
 なお、シンポジウム当時の年代観と最近の年代観を整理すると下表の如くである。

「猿投窯」展
 図録掲載編年表

シンポジウム
 における
 再検討窯式
 1983. 愛知県分布
 報告Ⅲ掲載
 猿投窯編年表

年代	窯式	期	窯式
600	I-50	II	
	I-17		H-50
700	I-41	III 700	I-17
	C-2		I-41
	I-25		C-2
800	N-32	IV	I-25
	O-10		NN-32
	IG-78		O-10
900	(K-78)	900 V	IG-78
	K-14		K-14
1000	K-90	VI	O-53
	O-53		H-72
1100	NN-82	1100 VII	百代寺
	百代寺		HG-105
	H-105		

(補注5) この点に関しては、特に美濃窯では虎溪山1号窯式から片口大平鉢が確認できるため、猿投窯でもH-72号窯式より出現すると考えた方がよいと思われる。具体的にはH-72号窯出土の高台部に円孔を有する大平鉢には片口がつくものと考えられる。

—— 第1日終了 ——